

妖女のねむり

泡坂妻夫

妖女のねむり



新潮社版

発行 ■ 昭和五十八年七月十五日

二刷 ■ 昭和五十八年八月二十日

著者 ■ 泡坂妻夫 あわさかつまお

定価 ■ 一〇〇〇円

ようじよ
妖女のねむり



発行者 ■ 佐藤亮一 発行所 ■ 株式会社新潮社

郵便番号一六二ノ東京都新宿区矢来町七一ノ電
話〇三―二六六一ノ業務五一―一・編集五四―一
ノ振替東京四一八〇八

印刷所 ■ 二光印刷株式会社

製本所 ■ 大口製本株式会社

Avasaka Printed in Japan 1983

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

一章	前世の願い	5
二章	今世の誓い	66
三章	現世の災い	102
四章	来世の疑い	166
五章	幻世の思い	212

人物紹介

柱田真一 山好きの大学生

三浦将夫 真一の先輩 花屋

◇ 町子 将夫の妹 学生

長谷屋麻芸 和風喫茶「麻芸」の女主人

◇ 美奈子 麻芸の母

西原康介 画家

◇ 富久江 その妻

◇ 牧湖 その娘

丸橋省三 美術商「せきれい堂」主人

替手 明 「せきれい堂」社員

平吹貢一郎 「柳美社」社員

大日向雅岳 画壇の大御所

島地朝契 吉浄寺住職

◇ あかね 朝契の妻

進藤潜之助 実業家

◇ みどり 潜之助の妻

小金井鉄秋 美術評論家

黒川照子 「黒光院慈恵会」教祖 黒光様

曲 章児 照子の愛人

平井邦彦 戦時中の医学生

妖女のねむり

一章 前世の願い

一

よどみなく書かれた、毛筆の崩し書きだった。

紙は二つ折りした半紙ぐらいの大きさの和紙で、押し伸ばされてはいるが、強く丸められたような皺が残っていた。紙の山が荷崩れを起こして、その和紙が現れたのだ。

他の紙のほとんどは古新聞、古雑誌などの印刷物だった。荷崩れはその部分の紙質が違っていたためだろう。和紙の下には茶色い荷造り用の渋紙が見えた。

真一はちょっと舌打ちをして、荷台の上で崩れた紙の山をざっと重ね直した。今度は週刊誌が一番上になった。表紙はなくなっていて、色刷りのグラビアがめくれている。ファッションのモデルかと思つたが、よく見ると、大きく開けられた梨色のスーツの胸から、紅色の乳首が覗いている。

「古雑誌はまだあるのよ」
女性の声がした。

「はい、今、すぐです」

真一はそのグラビアを切り取って、自分のショルダーバッグに押し込んだ。真一の車を呼んだ家の勝手口には、まだ古雑誌が山になっている。

赤金色の化粧レングを張った洋風の二階建て。玄関の傍にゆったりとした駐車場があり、その向うに緑に色付き始めた庭が見える。

真一は残りの古雑誌をすっかり荷台に運び入れた。ほとんどが経済雑誌だった。本の痛みはないが年代が古く、バックナンバーも不揃いでとても古木屋では扱ってくれる見込みはなさそうだ。

真一を呼んだのは四十前後の女性で、背が低く、肥って大きな目の持ち主だった。真一の仕事を最初から観察し続けている。

「ここは奥まっているでしょう。なかなか車が来てくれなくてね」
年齢に似合わない澄んだ声を出す。

「と、いつて、清掃車へ出してしまうのでは勿体ないでしょう」

「勿論ですよ」

真一は愛想よく言った。

「これはまだ立派な資源ですから」

真一は荷台からティッシュペーパーの箱を抱え出した。

「あら、これを全部？」

「そうですよ。奥様」

「奥様だなんて……お宅はサービスがいいのね」

「また、お願いします」

女性はトラックに書かれた字を読んで、変な顔をした。

「——三浦花店？」

「ええ、三浦花店。本日はアルバイトです」

女性は笑い出した。

「じゃあ、わたしと同じだわ」

「奥様も？」

「愛想のいい子ね。奥様なんかじゃないわ。わたしもアルバイトで働いているの」

「とてもそうは見えませんか」

「あなた、大学生？」

「そうです」

「家の息子もやっと大学を卒業したけれど、まだ安月給取りでしょう。一体、いつになったら親を楽にする気なんでしょうねえ。口を開けば偉そうな小言ばかり言うのよ。その点、女の子は優しいと言うけれど、変な男に付きまとわれたりするのがまた心配ね。わたしの知っている人の娘がそうなの。どこの馬の骨か判らないような男と付き合っているらしいの。親はその結婚には大反対。するとねえ。今の子供は何を考るか判らない。心中してしまうというのよ……」

捕まえられそうだった。

真一はティッシュペーパーをもう一箱渡して、運転席に乗った。

通り過ぎる門柱を何気なく見た。白い陶製の表札があった。「進藤潜之助」と書かれている。

目白通りを北に入った、目白台の住宅地。道幅は狭く入り組んでいるが、両側の住宅は皆ゆつたりとした庭を持っている。桜はすっかり若葉となり、木蓮や木瓜の花が盛りだ。

風はなく暖かな曇り空。人通りのない道を歩くほどの速度で流す。気が付くと、日本女子大の塀に突き当たった。真一は障害物のような塀を見て働く気がなくなり、車を普通速度にした。坂を下ると、すぐ商店街だった。三浦花店は高田商店街に店を開けていた。

駐車場に車を廻し、荷台に乗って回収した紙類を仕分けているとき、また、毛筆の文字が見えた。

反故——という言葉が、ふと真一の頭をかすめた。

荷台にある古紙の全ては古新聞、古雑誌などの印刷物である。たまに肉筆の文字があったとしても、ポウルペンで書かれた伝票の束や、フェルトペンで殴り書きされたメモの類いだ。いずれも紙

屑に過ぎない。けれども、和紙に毛筆で書かれた文字を見てみると、同じ紙屑と扱えないような気がしてきた。それを呼ぶには、反故という言葉でなければならぬ。

真一は丁寧はその紙を手に取り、拵げて見た。

見事な手蹟だということは一目で判った。筆の運びにためらいがなく、踊るような旋律が感じられる。ただし、内容を読もうとすると、ちよつと手に負えそうもなかった。漢字は草書体で仮名のように略され、仮名の多くは見慣れない変体仮名だった。

といって、筆者は気取つて紙に向かつたのでも、人の目を意識しているようでもなかった。優雅な文字はごく自然に筆から流れ出ている。内容は手紙か日記の断片のように思えた。

文字が読めないとなると、何となく心が引かれる。真一はその紙片が手放せなくなつて、目を遊ばせているうち、ふと「夢」という文字が見えてきた。「心」という字も判った。「朝」らしい形の字も拾えた。

「何、読んでるの？」

傍で声が出た。

真一は顔を上げた。三浦町子がいた。駐車場にはいつの間にか町子の赤い自家用車が駐まつて、ドアが開けられている。

「ずいぶん、熱心ね」

町子が車から出て来た。

白いジーンズに柿色のＴシャツで、丸い顔が少し野暮つた感じだが、健康的な若さに溢れている。

「また、地図を見ながら、遠い山のことなど考えているのでしょうか」

真一は答えなかった。町子が車のドアを閉め、近寄つて来た。

「柱田さん、このところ一生懸命働いているようね。相当お金が蓄まつたでしょう。ねえ、今年は

「どこの国へ行くの？」

今、和服の女性が文机に向かい、香りの良い墨を筆に含ませているところだった。町子の声でその幻想が消えてしまった。真一はぶつきら棒に言った。

「地図なんかじゃない。恋文さ」

「見せてよ」

町子は荷台に乗り上がって来て、眼鏡を掛けて真一の手元を覗き込んだ。

「……あら、古風ね。素敵じゃない」

「何て書いてあるんだらう」

「ばかね。貰った恋文が読めないの」

「恋文というのは冗談さ。古雑誌の間から出て来たんだ」

「ちよつと、貸してみて」

町子は紙片を受け取ると、全体を見渡していたが、すぐ、すらすらと読み始めた。

「——なやましき夢の波間にしばしたゆたひて、あやしう心のみだれさわぎつつ、なやみ多き朝のめざめに、ひかりはなやぎみてる空まばゆうて、ふくらみたるわか芽みるも恥しうこそ。浮世のに
ごり知らぬ身の——これまでね」

「何だね、そりゃ」

「悩み多き乙女の心境を綴ったのね。判らないの」

「お経でも聞いているみたいだな」

「駄目ねえ。きつと、これを書いた女性は恋をしているのね。いつも胸の内燃えているけれども、相手にはまだ打ち明けられない恋。その日も口に出しては言えないような夢を見て、心穏やかでない目覚めを経験したの。すっかり明るくなった春の空、はち切れそうにふくらんだ若芽を見るのも
恥しいような気がする」

「それなら、よく判る」

「いい紙を使っているわ」

「矢張り、恋文かい」

「さあ……これだけでは何とも言えないけれども。借りてもいいかしら」

「どうする？」

「友達に見せるわ。これは私の勘に過ぎないんですけど、ただの反故のような気がしないわ」

「今、何と言った」

「反故。不用になった紙のこと。知らなかった？」

「いや、紙屑などと言わないから感心したんだよ。じゃあ、有名な人が書いた字だと思うかい」

「そう。例えば、加賀千代などの肉筆だとしたら、凄いでしょ」

「真逆……」

「あら、冗談を言っているわけじゃないわ。ほら、最近、あちこちで有名な画家の絵が発見されたでしょう」

「さあ……」

「柱田さん、新聞を取っていないの」

「真一は車の荷台を指差した。

「あんなにあるとね、新聞や週刊誌はお金を出して買う気にはならないね」

「テレビは？」

「スポーツ番組しか見ない」

「呆れた人ね」

町子は古新聞を掻き廻し、一部の新聞を見付けると、社会欄を折り返して真一の前に差し出した。三月十五日付けの朝刊である。

「北斎の肉筆画まとめて発見」という見出しだった。それによると、絵は北斎の肉筆画六点で、長野高井郡小布施町にある農家の蔵に保存されていたものだ。発見のきっかけは、遺産整理のため、蔵が取り払われるようになったからだ。小布施は北斎が、晩年、度々訪れている縁故のある土地だが、発見者は絵が鑑定されるまで、そんな絵が自分の家にあつたとは信じられない、と言っている。「これから一週間もしないうちに、今度はポッティチェリやユトリロが発見されたのよ」

町子はなお新聞を探していたが、諦めたようだった。

「だめだわ。確か東日プレスのスcoopだったと思うけれど、その日が見当たらないわ」

「いや、聞く方が楽だよ」

「そんな呑気なことばかり言つて。ポッティチェリと聞いて、びっくりしないの」

「別に……」

「歯応えのない人ねえ。ポッティチェリは十五世紀のフィレンツェの大画家です。これも信じられないような話だけれど、今度のポッティチェリも、北斎と似たような経過で発見されたのよ。」

絵の持ち主は品川に住む会社員で、父親の死後、せきれい堂という骨董古美術商とアトリエを整理していたとき、父親の遺作に混っていた問題の絵を発見したのよ。絵は三点あつて、ユトリロの小品とゴヤのデッサン。そしてあと一枚が問題のポッティチェリなの。ポッティチェリはテンペラ画で——」

「テンペラ画？」

「ええ。水彩画と油絵の中間、といった感じの絵ね。画調があまりポッティチェリに似ているので、試しに専門家に見せたところ、どうやら本物らしいということになって、騒ぎが大きくなったの。家で取っている東日プレスの日曜版に、その絵がカラーで大きく載っていたわよ。貴族の女性の肖像画で、柱田さん好みの美人だったわ」

「知らなかったなあ」

「同じような出来事は、続けて起こるものだわ」

「この反故も話題になるような人の文書かも知れないと言うのかね」

「そう」

町子は車の荷台を見廻した。

「これは、巻紙の一部だから、まだ残りがどこかにあるかも知れないわね」

「でも、一一捜してはもらえないよ。これから、工場へ行くんだ」

「売りに行つては駄目よ」

町子は命令するように言った。

「……でも、明朝、車が使えないと、三浦が困るだろう」

「別の車を使えばいい。兄にはわたしから話しておくわ」

「僕は忙しいんだがなあ……」

町子は真一を睨むような目をした。

「柱田さんも変な人ね。あなたは忙しい忙しいと言つては、危険で寒い山に登つて行って、ぼうっとして帰つて来るんでしょ」

「……それを言われると、何とも言えませんね」

「いいわ。柱田さんに手伝えとは言わないから。その代り、一晩、雨が降っても濡れないように、きちんとシートをしておいて頂戴ね。判つた？」

「判つたよ」

町子は紙片を持ったまま、荷台から飛び降りた。

翌朝、三浦花店の駐車場に行つてみると、三浦兄妹は紙の山と格闘の最中だった。荷台にあった半分ばかりが地面におろされている。

「お前のために、今日は仕事にならなくなった」

三浦将夫は半袖シャツから陽焼けした腕を出し、鉢巻を締めていた。

「一体、どうしたんです」

「宝捜しだとさ」

真一の声を聞いて、町子が古雑誌の向うから顔を出した。

「柱田さんの下宿、電話が通じないって、本当なの」

「ええ」

真一は苦笑いした。

「家賃の値上げに反対したら、大家が電話の取り継ぎをしてくれなくなりました」

「不便じゃないの」

「下宿にいるのは寝るときだけですから」

「急用のときはどうするのよ」

「電報を下さい」

「わたしなんか、生まれてから電報など貰ったことは一度もないわよ」

「死ねば弔電が来ます」

「なぜ、わたしを殺すの」

「早く仕事を始めろ」

三浦将夫が怒鳴った。

「そう、早くしなくちゃ」

「捜し物は、例の文書ですか」

と、真一が訊いた。

「そう。わたしの勘が当たったわ。あの文書は大変な品物らしいわ。友達は一見ただけで顔色を変えたもの」

町子は古新聞の上に乗せてある紙を指差した。昨日の紙片のコピーだった。真一は紙を手に取り、下にもう一枚のコピーがあった。これは初めて見る文字だった。

「これは？」

「有名な人の書簡よ。署名があるでしょう」

相変らずの達筆だが、最後に記された名だけはどうかやら読むことができる。

「なつ子と書いてある」

「そう。樋口夏子の筆跡よ」

「樋口夏子……」

「で判らなければ、樋口一葉と言った方がいいでしょう」

真一は思わず町子の顔を見た。町子の目が輝いていた。

「あの、若くして傑作を残して死んだ、薄幸の明治の女流作家——」

「そう。『にこりえ』や『たけくらべ』の作家。その一葉の残した書簡がこれ。文学館に保存されているもののコピー。そして、これが、昨日柱田さんがちり紙と交換して来た「反故」

真一は改めて二枚のコピーを見較べた。

「どう、同じでしょう」

「……そう言われても、こういう文字とは付き合いが薄い」

「それなら、手紙の方の署名の〈な〉の字と、こちらの方の〈なやましき夢〉の〈な〉の字とを較

べてご覧なさい」

「……そう言われると、同じ手跡に見える」

「でしょう。わたしの友達は、熱心な一葉の研究家なの。一葉のことなら、何月何日、一葉がどう

していたかまでちゃんと記憶しているほどよ。一葉の文字を模写して、その癖を全部知っている。

だから、一目見て、この反故が一葉の手跡だということがすぐに判ったわけ」